

平成 22年 5月 10日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19500862

研究課題名（和文）ポスト＝コロニアル状況下における日本の人類諸科学

研究課題名（英文）Anthropological Sciences under Post-colonial Situation in Japan

研究代表者

坂野 徹（SAKANO TORU）

日本大学・経済学部・准教授

研究者番号：70409142

研究成果の概要（和文）：本研究は、アジア太平洋戦争に敗北し、日本が東アジアに保有した広大な植民地を喪失した 1945 年以降の日本における人類諸科学（自然人類学、民族学、民俗学など）の歴史を跡付け、人類諸科学における戦時中との連続性／非連続性について考えようとするものである。（1）九学会連合の対馬調査（1950・51 年）と（2）自然人類学者による混血児研究、生理学者による環境適応能力研究に焦点を当て、これらの研究が、アジア太平洋戦争とその後の東アジアにおける冷戦構造の枠組みの中で行われていたことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This research traces the history of anthropological sciences (physical anthropology, ethnology and folklore) in Japan after 1945, when Japan lost all colonies in East Asia, and considers continuity and discontinuity of these sciences across the defeat. Specially, it takes up (1) the research on Tsushima by Council of Nine Learned Societies (1950-51) and (2) the research on mixed-blood children by physical anthropologists and the research on environmental adaptability by physiologists. It became clear that these researches were affected by the Asia-Pacific War and the following cold war structure in the East Asia.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2008 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：科学史・人類学史

科研費の分科・細目：科学社会学・科学技術史

キーワード：ポスト＝コロニアル、人類学、民族学、民俗学、九学会連合、対馬、朝鮮戦争、混血、適応能力

1. 研究開始当初の背景

明治初頭から 1945 年に至る時期の日本における人類諸科学の歴史については、1990 年

代以降、申請者自身のもの（『帝国日本と人類学者』勁草書房、2005 年など）も含めて多くの研究が積み重ねられ、その全体像がある

程度明らかになってきた。だが、日本敗戦に伴って、従来、調査研究の場であった海外植民地・占領地が失われた1945年以降の人類諸科学の展開に関する科学史的研究は全く手つかずの状態であった。

そこで、本研究では、1945年から1960年代初頭までの日本の人類諸科学の展開を跡付けることで、当該領域の研究における「戦前」「戦中」と「戦後」の連続性／非連続性を明らかにするための第一歩としたいと考えた。すなわち、本研究では、いまだ海外調査が不可能で、人類学者の調査地が日本国内に限られていたGHQ統治時代から、海外調査が本格化する1960年代初頭に至る時期に焦点を当て、敗戦後再び研究を開始した当時の代表的研究者たちが有する植民地／戦争経験が、「戦後」の人類諸科学の展開に対してもった意味を明らかにすることを目指した。

2. 研究の目的

当初の研究計画では、以下の三つを明らかにすることを目的とした。

(1) GHQ統治時代の人類諸科学の状況を、各学問領域の学会誌、論文、著作などの分析を通じて明らかにする。

(2) 1950年代における人類諸科学の状況を、当該時期における日本国内を対象とした調査研究を中心に跡づける。

(3) 研究者による海外調査が本格化する1960年代初頭の当該領域の状況を、学会誌、各種調査隊の報告書などを通じて明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 「戦後」日本の人類諸科学の歴史に関わる先行研究、関連文献などを収集するとともに、主要研究者たちの著作、論文を収集整理し、分析を加えた。

(2) 2005年度から運営している、本研究テーマと密接に関わる研究会（植民地と学知研究会）を引き続き運営し、全国の研究者と意見交換をはかるとともに、知識の供与を受けた。

(3) 以上を通じて得られた成果を、研究会（植民地と学知研究会）および国内外の学会（日本科学史学会、AAAS, Pacific Division）において発表した。

(4) 本研究の成果を論文集（共著）の一部として発表するとともに、単著の準備を続けている。

4. 研究成果

(1) アメリカの地域研究（area studies）の影響を受けた戦後最初の大規模総合調査と称される九学会連合（人類学会、民族学協会、社会学会、考古学会、民間伝承の会）により1947年、六学会連合として発足、48年より

地理学会、宗教学会が加わり八学会連合に。その後、1951年より心理学会が加わり九学会連合）の対馬調査（1950・51年）に焦点を当て、分析を行った。その結果、明らかになった研究成果は下記の通りである。

①当該調査には、1945年以前、日本の植民地・占領地で調査研究活動に従事した代表的研究者が中心的役割を果たしており、その意味でも、「戦前」「戦中」と「戦後」の連続性が見て取れること。

②対馬が調査対象として選ばれた背景には、日本敗戦に伴い、国境線が引き直された結果として、国境に接する「辺境」の地域と表象されるようになった対馬に対する地政学的関心があったこと。

③しかも、調査開始直前に勃発した朝鮮戦争（1950-53年）のニュースは、対馬調査隊に大きな緊張感を与え、研究者たちは、時に朝鮮半島から大砲の音が聞こえるような状況下で対馬調査を行った。そうした調査時の状況が調査結果に大きく影を落としていること。

④当初、調査隊の関心は対馬の文化的・人種的帰属が大陸（朝鮮）か日本かという問題にあったが、こうした問題関心の背景には、当時の国境線をめぐる日本と韓国の政治的軋轢（李承晩・韓国大統領による対馬返還要求など）という問題が存在したこと。また、何よりも対馬が「日本」であることを証明することは対馬住民にとって切実な願いであり、調査隊員たちもそうした「期待」に沿った結論を導き出していたこと。

⑤例えば、民俗学者・宮本常一の有名な「対馬にて」に登場する「寄りあい」の話—日本の村落社会に存在する土着的な「寄合民主主義」として脚光を浴びてきた—は、九学会連合対馬調査時の経験に基づくものだが、こうした宮本の議論の背景にも、1950年当時の対馬の帰属をめぐる日韓関係が影を落としている可能性があること。

(2) 自然人類学者、生理学者によって進められた混血児研究（主として、エリザベス・サンダース・ホームなどの混血児収容施設で1948年より開始）および日本人の環境適応能力研究（1946年より開始）に焦点を当て、分析を行った。その結果、明らかになった研究成果は下記の通りである。

①自然人類学者による混血児研究は、GHQ統治下、浮上した「混血児問題」（GHQ関係者と日本人女性との間での混血児誕生とその社会問題化）を背景としていたが、その起源は、アジア太平洋戦争中の占領地拡大に伴って研究者の大きな関心事となった「戦中」の混血研究にあること。

②混血児研究は、「混血児問題」に対する社会的関心が薄まる1970年代初頭まで続くが、こうした継続的な研究は、「戦後」日本の代表的自然人類学者のトレーニングの場となっていたこと。

③「戦後」日本の生理学者によって進められた環境適応能力研究は、もともと「戦中」の占領地拡大に伴い浮上した日本人の様々な環境への適応能力の研究（中心は熱帯への適応能力）を起源としていること。

④さらに、その起源を遡ると、満州国を舞台として行われていた環境適応能力研究、さらには731部隊における人体実験とも密接な関わりをもつこと。

以上の研究成果を国内外の学会で発表するとともに、一部は雑誌論文、図書に発表し一定のインパクトを与えたが、今後はさらに下記のような形で発展させていく予定である。

(1)九学会連合は、対馬調査後、奥能登調査、奄美調査と日本各地で総合的学術調査を実施していくが、こうした九学会連合の調査研究の歴史を「戦後」日本社会の変容の中に位置づける研究を継続する。なお、その成果は、単著および論文集として発表予定である。

(2)「戦後」の混血児研究および環境適応能力研究についても、さらに関連領域の研究（特に「日本人起源論」研究）と合わせて、研究論文、図書として発表していくことを計画している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 坂野徹、泉靖一の朝鮮戦争、科学史研究、査読無、48巻252号、2009、pp245-252
- ② 坂野徹、「寄りあい」と朝鮮戦争、図書、査読無、730号、2009、pp16-19

[学会発表] (計3件)

- ① 坂野徹、泉靖一の朝鮮戦争、日本科学史学会、2009年5月24日、九州大学
- ② SAKANO, Toru, Mixed-blood and Adaptability: Japanese Racial Sciences, 1930s-1970s, AAAS Pacific Division, June 16, 2008, Hawaii Preparatory Academy

[図書] (計2件)

- ① 坂野徹、青弓社、帝国の視角／死角、2010、近刊予定
- ② 坂野徹、岩波書店、人種の表象と社会的リアリティ、2009、pp188-215

[産業財産権]
○出願状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

坂野 徹 (SAKANO TORU)
日本大学・経済学部・准教授
研究者番号：70409142